

〔袖中抄七〕ふじのなるさは○略 中

富士とは、郡の名をとれる也。

〔士峯錄序〕君子國有一卷石兼山艮之象也、喚而名富士山、一曰柴山、一曰二井山蓬萊山者其別號、吾邦之地鎮也、或曰取郡之名而名山也、或曰取山之名而名郡也、未知孰是、世俗殊其字義聲音而附會其說、頗似有據、珠玉玲々瑩々而出、材木鬱々藪々而饒、德澤以富士民、故曰富士、昔山麓有老翁老嫗、養鶯卵、卵化而成女兒、容色驚人、而又得黃金於竹林而富家、故曰富兒、其女兒長而與帝王契、而後其婦昇天去、故曰婦盡、比之他之積土、挺秀而不二、故曰不二、四序含六出、旦暮吐烟霧而千古萬今使不盡、故曰不盡、禁戒殺生、慈育禽獸、庶而富、故曰富慈、有神僊而居、藏不死之藥、故曰不死、又曰山者仁者之象也、仁者壽、故曰不死、萬葉集用或布仕、或布士、或不自、或布時、或布自之字、皆假其音而已○下

〔古史傳三十一〕福慈岳は卽富士山なり、和名抄郡鄉部に、富士浮志とあり、諸書に又不盡、布士、不自、富祇等、尙色々に書るは福慈の省言なり、抑福慈と書る字は常陸風土記に所見たるが、此は富久士とも布久士とも讀べくおぼゆ、其は既に出たる氏の伊福部を五百木部とも稱ひ、御吹玉を御富伎玉とも云を思に、此山の名はもと富久士なりしを、布久士と云ひ、省て富士と云りと通れば、前には福は布の假字にも用べき字なれば、福慈を乃フジと讀べく思れど、後に熟思ば、こはなり必ずホクジと讀べく書たるなり、玄道云、或人も、富は古事記に意富岐美、又意富祁命、淤富美に夜又富良富良等、皆保の假字に用られたりと云へりき、然らば富久士とは何なる意ならむと云に、富は穗なり、久士は彼高千穂之久士、布流峯の久士と同く奇の義にて、此山の卓て高く、天進て穗の如く奇靈に立たる義なるべく、其郡名を富士と云は、此山の立たる故の名なるべし、下に引く都良香朝臣の富士山記有は、本末を達し説なり、〔中略〕玄道云、〔中略〕取郡名とは、袖中抄神社考、猶會稽山之在會稽郡、金華山之在金華郡者七、富士其一也、蓋由山得名、

〔和漢三才圖會甲斐十九〕甲斐白嶺子

又云

甲斐之嶺子